

エッセイ

古歌を訪ねてその六

古歌と音楽〜「春の夜」

丹下 重明

風かよふ寝ざめの袖の花の香に
かほる枕の春の夜の夢

新古今和歌集

春歌下・一一二

皇太后宮大夫俊成女

好きなクラシック音楽の世界に
浸りながら、王朝の古歌のあれこ
れを思い浮かべることがありま
す。およそ縁遠いように思われる
二つなのですが……。
シューベルト

「ピアノ・トリオ2番変ホ長調
D929」

村上春樹氏は小説「ダンス・ダ
ンス・ダンス」の中で、この曲に
ついてこう書いています。

『僕はずっと昔から、春になる
とこのレコードをよく聴いた。春
の夜が含むある種の哀しみが、こ
の曲のトーンに呼応しているよう
に僕は感じていた』

この曲を聴いていると、彼の言

う「春の夜の哀しみ」がそれとな
くわかるのです。

特にこの曲の第2楽章、アンダ
ンテ・コン・モトの静寂と哀愁の
曲想にそれを感じます。出だしの
ところで、短いピアノの和音に
のってチェロが、次にピアノがひ
そやかにテーマを弾いて始まる部
分や、PPで静かに終わる最終部
分には、心の中をさざ波のように
感動が拡がって行きます。

冒頭の俊成女の歌には、この曲
に通じるなにかを感じます。部立
では春歌となっていますが、恋歌
との見方が一般的です。一首の大
意は

「心地よい風にふと目覚めると、
私の袖は、風が運んだ花の香が漂
い、それまで春の夜の夢を見てい
た枕も香っています」

そんな「春の夜の夢」にはほの
かな恋の香りがします。かすかな
哀しみをともなった恋の香りが
……。

◇ ◇ ◇

王朝和歌の最後を飾る「新古今
和歌集」（1205年撰進・以下
新古今集）には、優れた女流歌人
がきら星のように並んでいます。
その中でも、俊成女（生没年不詳・

推定では1171頃〜1251
頃）は式子内親王、宮内卿とも
に、後鳥羽院歌壇を代表する女流
歌人です。新古今集には、女流と
しては筆頭の式子内親王の四九首
に次いで二九首入集しています。
当代の男女歌人を合わせたなかで
もベスト・テンに入ります。因み
に一位は西行の九四首です。

三十才過ぎ頃、後鳥羽院の女房
として出仕した彼女の女房名は
「俊成卿女（しゅんせいきょう
じょ）」ともですが、新古今集
では「皇太后宮大夫俊成女」となっ
ています。いずれも養父藤原俊成
に因んだ女房名です。

その俊成は、実は俊成卿女の祖
父なのです。彼女の母は俊成の長
女、八条院三条ですから、あの藤
原定家は叔父に当たるわけです。

父は藤原盛頼（平家打倒の鹿ヶ谷
謀議の首謀者の一人で、処刑され
た藤原成親の弟）です。盛頼は兄
のとぼちちりで官職を失ひ、八条
院三条とも離婚し後に出家しまし
た。俊成卿女は俊成が引き取り、
定家らと共に御子左家の一員とし
て育てられました。

二十才頃、俊成卿女は、ほぼ同
年配だった源通具の妻となりま

す。通具は当時の朝廷内の実力者、
土御門家（村上源氏中院流）の内
大臣・源通親の次男で大納言でし
た。

通具は、後に新古今集の撰者に
なっていて、和歌にも通じた人物
だったと思われるのですが、同じ
く撰者だった定家は、「明月記」
の中で通具を和歌には無見識な人
物と非難しています。

一男一女をもうけますが、十年
たらずで事実上の夫婦関係は解消
しました。原因は夫通具が、土御
門天皇の乳母として権勢を誇り、
按察局と称された、藤原信子（姉
在子は後鳥羽院女御で土御門天皇
の母）を正妻として迎えたことで
した。

◇ ◇ ◇

俊成卿女がこの辛い状況を切り
抜けることができたのは、御子左
家ではぐくまれた優れた和歌の才
能によるものでした。立場を失っ
た彼女を受け入れたのが後鳥羽院
です。女房出仕は後鳥羽院の強い
要望に拠ったものといわれています。
歌人としても優れていた後鳥
羽院は、彼女の歌の才能を高く評
価し、三十才を超えていた彼女を
通常の女房ではなく、専門歌人と

しての上臈女房として出仕させたのです。この後鳥羽院への出仕については、少なからず俊成や土御門家の支援もあつたようです。

後鳥羽院歌壇での活動は約十年ですが、秀歌の多くはこの時期(通具との別から院女房出仕の頃)に詠まれたと思われまゝ。和歌史上有名な「千五百番歌合」を始め「仙洞句題五十首」「水無瀬恋十五首」などの歌合で高い評価を得た彼女の作品は、前記のとおり新古今集にその多くが採られています。

その頃の代表的詠歌を二首、いずれも新古今集歌です。

橘のほふあたりのうたた寝は

夢も昔の袖の香ぞする

夏歌・二四五

下燃えに思い消えなむ煙だに

あとなき雲の果てぞかなしき

恋二・一〇八一

先の歌は、「千五百番歌合」での作で、典型的な本歌取の一首です。古今集にあるよみ人知らずの次の歌が本歌です。

五月まつ花橘の香をかげば

むかしの人の袖の香ぞする

この歌は「古今集」や「伊勢物語」六十段などにも取り上げられているよく知られた一首でもあります。

後の歌は、「仙洞句題五十首」からの作品で、新古今集・十二巻・恋歌二の巻頭を飾る歌です。伝えられるところでは、後鳥羽院の命により、その位置となつたということですが、大意は「私は、人知れず心に思い恋い焦がれたまま死んでしまふでしょうが、その火葬の煙も跡をとどめず、雲となつて消えていくと思うと悲しい限りです」。恋歌が得意だつた俊成卿女らしい恋の哀しみを切なく訴えている作品です。なおこの夏歌も、冒頭に挙げた一首と同様に、内容的には恋歌と言えます。

ただしこれは新古今時代の歌人たちに、共通して言えることですが、こうした四季や恋その他のテーマの歌が、実体験から詠まれることはむしろ少ないのです。

前記の二首でも、先の歌は詞書に「千五百番歌合に」とある兼題作品といわれ、後の歌には、俊成卿女が恋の「哀しみ」について、夫通具との離別の悲哀を詠つてい

るとする見解がある一方、虚構に過ぎないと否定する専門家の見解もあります。離別後も通具とは交流があり、ただ悲嘆に暮れていたわけではないというのです。

ただそうではあつても、こうした作品には、虚実を超えた感性の鋭さと抒情の深さが感じられます。新古今時代を代表する優れた女流歌人らしい詠歌といえます。

◇ ◇ ◇

その後鳥羽院歌壇も「承久の乱」により、後鳥羽院が隠岐に配流されたことで瓦解しました。特に後鳥羽院の子で皇位を継いだ順徳天皇は、俊成卿女が親しく和歌を指導していたといわれ、父同様に配流の身となつたことは、彼女にとつても大きなショックだつたと思われます。

その後四十三才で出家しますが、八十余才の長寿だつた俊成卿女は、その後も長く宮廷歌壇で活躍しています。

最晩年には御子左家の荘園の一つだつた、播磨国越部こしべの庄(現在の兵庫県竜野市付近)が彼女に譲られ、七十一才の頃、この地に下り、ここが終焉の地となりました。その間、夫だつた通具、男女二

人の子にも先立たれ、歌人として俊成卿女を支えてくれた、後鳥羽院や定家も既に亡くなつていました。

ながむればわが身ひとつの

あらぬ世に

むかしに似たる春の夜の月

彼女の最晩年の歌の一つです。

親しい人たちは既に亡く、春の夜の月だけが昔と変わらないと、一人この世に残された寂しさを詠っています。ここでも「春の夜」が月とともに詠われています。

◇ ◇ ◇

冒頭にあげたシューベルトのピアノ・トリオの第2楽章には、ある種の温もりとともに、愁いを含んだ哀しみが込められています。それらは俊成卿女の歌にも共通する「春の夜」にふさわしい情感なのだと思えます。

風かよふ寝ざめの袖の花の香に

かほる枕の春の夜の夢

春の夜ははかなく哀しい夢の中なのでしょいか……。

おわり